

南瓜

芥川龍之介



何しろ南瓜かぼちゃが人を殺す世の中なんだから、驚くよ。どう見たつて、あいつがそんな大それた真似をしようなんぞとは思はれないぢやないか。なにほんものの南瓜かぼちゃか？ 冗談じやうだん云つちやいけない。南瓜は綽号あだなだよ。南瓜の市兵衛いちべゑと云つてね。吉原よしはらぢや下つぱの——と云ふよりや、まるで数かずにはいつてゐない太鼓持たいこもちなんだ。

そんな事を聞く位ぢや、君はあいつを見た事がないんだらう。そりや惜しい事をしたね。もう今ぢや赤い着物を着てゐるだらうから、見たいつたつて、ちよいとは見られるもんぢやない。頭でつかちの一寸法師いっすんぼし見たいなやつでね、夫それがフロツクに緋天鳶絨ひびろうとのチヨツキと云ふ拵こしらへへなんだから、ふるつてゐたよ。おまけにその鉢はちの開いた頭ひらへちよんと鬻まけをのつけてゐるんだ。それも粋いきな由兵衛よしべゑ奴やつこか何かでね。だから君、始めて遇あつたお客は誰でもまあ毒氣どくきをぬかれる。すると南瓜かぼちゃのやつは、扇子で一つその鉢はちの開いた頭ひらをほんちやつて、「どうぞでげす。新技巧派たいしちもちの太鼓持たいこもちもたまには又おつ乙おつでげせう」つて云ふんだ。悪い洒落しやれさね。

洒落と云へば、南瓜かぼちゃにや何一つ芸うらしい芸うがない。唯ただお客をつかまへて、洒落しやれ放題ほうだい洒落しやれる丈だけなんだ。それが又「にはかに洒落しやれられません」つて程にも行ゆかないんだから、心細こまどいやね。尤もつともそこはお客もお客で曲まがりなりにも洒落しやれのめせば、それでもう多たわいくなく笑わらつてゐる。云はば洒落しやれのわかつたのが、うれしくつてたまらなさと云ふ連中れんちゆうばかりなんだ。

あいつも始はじめはそれが、味み噌そけ気けだつたんだらう。僕ぼくが知しつてからも、随ずいぶん分ぶんいい気きになつて、撥くすぐつたもんさ。所ところがいくら南瓜かぼちゃだつて、さう始はじめ終しゆう洒落しやれてばかりゐる訳わけにや行ゆきやしない。たまには改かまつて、真ま面目めいな事も云ふ時ときがある。が、お客の方かたぢや南瓜かぼちゃは何なに時ときでも洒落しやれるもんだと思おもつてゐるから、いくらあいつが真ま面目めいな事を云つたつて、やつぱり腹はらを抱かかへて笑わらつてゐる。そこがこの頃ころになつて見ると、だんだんあいつの気きになり出したんだ。あれで君、見かけよりや存ぞん外げ神じん経けい質しつな男おとこだからね。いくらフロツクに緋天鳶絨ひびろうとのチヨツキを着よして由兵衛よしべゑ奴やつこの頭かぶを扇あふ子こで叩たたいてゐたつて、云ふ事ことまで何なに時ときでも冗談じやうだんだ

1 「行かないんだから」は底本では「行かないんだから」

とは限りやしない。真面目な事を云ふ時は、やつぱり真面目な事を云つてゐるんだ、事によるとお客よりや、もつと真面目な事を云つてたかも知れない

——とまあ、僕は思ふんだがね。だからあいつに云はせりや「笑ふ手前が可笑しいぞ」位な気は、とうの昔からあつたんだ。今度のあいつの一件だつて、つまりはその不平が高じたやうなもんぢやないか。

そりや新聞に出てゐた通り、南瓜が薄雲太夫と云ふ華魁に惚れてゐた事はほんたうだらう。さうしてあの奈良茂と云ふ成金が、その又太夫に惚れてゐたのにも違ひない。が、なんぼあいつだつてそんな鞆当筋だけぢや人殺しにも及ぶまいぢやないか。それよりあいつが口惜しがつたのは、誰もあいつが薄雲太夫に惚れてゐると云ふ事を、真にうける人間がゐなかつた事だ。成金のお客は勿論、当の薄雲太夫にした所で、そんな事は夢にもないと思つてゐる。尤もさう思つたのも可愛さうだが無理ぢやない。向うは仲の町でも指折りの華魁だし、こつちは片輪も同様な、ちんちくりんの南瓜だからね。かうならない前に聞いて見給へ。僕にしたつて嘘だと思ふ。

それがあいつにやつらかつたんだ。別して惚れた相手の薄雲太夫が真にうけないのを苦に病んだらしい——だからこそその人殺しさ。

何でもその晩もあいつは酔つぱらつて薄雲太夫の側へ寄つちや、夫婦になつてくれとか何とか云つたんださうだ。太夫の方ぢや何時もの冗談と思ふから、笑つてばかりゐて相手にしない。しないばかりなら、よかつたんだが、何かの拍子に「市兵衛さんお前妾に惚れるなら、命がけて惚れなまし」つて云つたんださうだ。それがあいつの頭へぴんと来たんだらう。おまけに奈良茂がその後から、「かうなると汝と己とは仇同志や。今が今でも命のやりとりしてこまそ」つて、笑つたと云ふんだから機会が悪い。すると、南瓜は今まではしやいでゐたやつが、急に血相を変へながら坐り直して——それから君何をやつたと思ふ。あいつがそのとろんこになつた眼を据ゑてハムレットの声色を使つたんだ。それも英語で使つたんだと云ふから、驚かあね。

これにや一座も、呆氣にとられた。——とられた筈さ。そこにゐた手合にや、遊扇にしろ、蝶兵衛に

しろ、英語の英の字もわかりやしない。其角だつて、「奥の細道」の講釈はするだらうが、ハムレットと来た日にや名を聞いた事もあるまいからね。唯その中でたつた一人、成金のお客にやこれがわかる——そこは亜米利加で皿洗ひか何かして来ただけに、日本の芝居はつまらないとあつて、オペラコミックのミス何とかを鼻屑にしてゐると云ふ御人体なんだ、がもとより洒落だと心得てゐたから、南瓜が妙な身ぶりをしながら、薄雲太夫をつかまへて、「You go not till I set you up a glass/Where you may see the inmost part of you.」とか何とか云つても、不相変げらげら笑つてゐたさうだがね。——そこまでは、まあよかつたんだ。それがハムレットの台辞よろしくあつて、だんだんあいつが太夫にためよつて来た時に、間の悪い時は又間の悪いもので、奈良茂の大将が一杯機嫌でどこで聞きかじつたか、「What, ho! help! help! help!」とポロニアスの声色を使つたぢやないか。南瓜のやつはそれを聞くと、急に死人のやうな顔になつて、息がつまりさうな声を出しながら、「How, now! A rat? Dead for

a ducat, dead!」と云ふが早いか、いきなり奈良茂の側にあつた鮫鞘の脇差を引こぬいて、ずぶりと向うの胸へ突こんだんだ。そこでほんもののポロニアスなら「Oh! I am slain.」と云ふ所なんだが、刀は切れるし、急所だし、うんと云つたきりお客は往生さ。その血の出た事つたらなかつたさうだよ。

「見やあがれ。己だつて出たらめばかりは云やしねえ。」——南瓜はさう云つて、脇差を抛り出したさうだがね。返り血もかかつたんだらうが、チヨツキが緋天絨鶯なので、それがさほど目に立たない。人を殺したつて、殺さなくつたつて、見た所はやつぱりちんちくりんの、由兵衛奴にフロツクを着た、あの南瓜の市兵衛が、それでもそこにゐた連中にや、別人のやうに見えたらう。——見えたんぢやない。まるで別人になつてしまつたんだ。だから、あいつが御用になつて、茶屋の二階から引立てられる時にや、捕縄のかかつた手の上から、桐に鳳凰の繡のある目のさめるやうな綺麗な仕掛を羽織つてゐたと云ふぢやないか。なに誰の仕掛だ。勿論薄雲太夫のや。

それ以来吉原は、今でもあいつの噂で持ちきつて
ゐるやうだ。兎に角これで見ても、何でも冗談だと
思ふのは危険だよ。笑つて云つたつて、云はなかつ
たつて、真面目な事はやつぱり真面目な事にちがひ
ないからね。

(大正七年二月)

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
1971（昭和 46）年 6 月 5 日初版第 1 刷発行
1979（昭和 54）年 4 月 10 日初版第 11 刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007 年 6 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。